

シンガポールだより

VOL.36



皆様、こんにちは。小山市からクレアシンガポール事務所に赴任しております、中田です。クレアへの赴任が始まってからもうすぐ3年が経とうとしています。最初の2年は、新型コロナウイルスの影響により対面・実地での事業実施が難しい期間となりましたが、その分世界的にオンラインを用いた対応が大きく進展した時期でありました。今でこそ一般的になりつつあるオンラインでの事業展開ですが、当初は手探り状態であったのを覚えています。クレアにおいても、オンラインでのセミナーを開催する機会がありましたので、運営方法等について、学びを得ることができました。

小山市でも、オンライン会議ツールを使ってシンガポールの様子を市民の方に中継するという取組を行いました。10月には、市立下生井小学校の児童を対象に、シンガポールのシンボルであるマーライオン公園や、住居が多くシンガポールでの日々の生活の様子が見て取れるエリアなどを中継しながら、日本とは異なるシンガポールの風土や環境について説明しました。中継終了後、児童たちからは非常に多くの質問があり、小山市にいながら外国の様子を体験し、日本国外への関心を深めることができる取組となったと考えています。

令和4年度に入ってから、世界的に新型コロナウイルスへの対応が緩和ムードとなり、国境を越える人の移動も著しく活発となりました。クレアシンガポール事務所においても、様々な事業が対面、もしくはコロナ禍中に培ったオンライン対応の知見を生かし、対面とオンラインを組み合わせたハイブリッド形式で実施されることとなり、非常に目まぐるしい上半期となりました。

コロナ規制の緩和を受け、今年度は旅行博(旅行会社や観光地等が促進を行う旅行の展示会)が複数再開されました。クレアシンガポール事務所では、シンガポールや周辺国で開催されるB to C(企業でなく一般客向け)の旅行博に出展し、訪日観光のPRを行いました。シンガポールの方は、団体のツアーよりも個人の旅行を好むようで、水際対策緩和前の旅行博では、「いつ個人旅行ができるようになるのか」との問い合わせを多く受けました。また、訪日のリピーターが多く、旅行先の傾向としては、東京・京都・大阪などのゴールデンルートではない場所が、より関心を引きやすいようでした。

10月11日から日本への個人旅行が可能になりましたので、今後東南アジアから多くの旅行者が日本を訪れることが期待されます。



旅行博で日本の観光PR活動に従事

さて、話題は変わりますが、シンガポールにおけるゴミ・環境問題についても触れたいと思います。

シンガポールでは街中のいたるところにゴミ箱が設置されているほか、住居内にもダストシュート(マンションやビルにあるゴミ捨て用のたて穴)が設置されていることが多く、指定のゴミ捨て場やゴミの種類による曜日指定のある日本とは異なり、基本的にいつでもゴミを捨てることができます。居住者としては便利である一方、ゴミの分別は日本ほど進んでおらず、ほとんどの家庭ゴミを焼却し、焼却灰と、焼却できないゴミをセマカウ島という島に埋め立てています。

このセマカウ島はシンガポール沖約8kmにゴミの埋立地として作られた人工島で、2045年までの使用が見込まれていました。しかしながら人口の増加等に伴って排出されるゴミの量も増え、現在この島は2035年には満杯になると予測されています。シンガポール政府は2001年から、青色のリサイクル用廃棄ボックスを各HDB(公営住宅; シンガポール住民の8割以上がHDBに居住しています)等に設置するなど対策を進めていますが、2021年の家庭ゴミリサイクル率は13%にとどまっており、この背景には上記のように分別することなく手軽にゴミを捨てられる環境があると言われています。



リサイクル用廃棄ボックス

国土が小山市の4倍ほどしかないシンガポールにとって、ゴミを適切に処理・再利用し、クリーンで持続可能な環境を維持することは重要な課題となっています。この課題を解決するために、シンガポールではゴミの焼却灰を建材に再利用したり、焼却時の熱を水処理施設への電力供給に再利用したりするなど、様々な技術が活用されています。

小山市でも、ゴミを資源として再利用する技術が活用されています。今年は、とちぎ国体・とちぎ大会が開催されましたが、栃木県選手団のユニフォームは、市内事業者の技術によりペットボトルを再生した繊維を用いて作られたものでした。日本においても、環境省が循環経済への移行を施策として掲げており、資源の再利用はますます重要となっています。日本とシンガポールは経済的にも文化的にも強いつながりがありますが、持続可能な社会の実現に向けた連携も、今後ますます重要になっていくのではないかと感じます。